



# 十代の主張 発表作文

## 「人権の大切さ」

伴谷小学校 六年 原田 葵

「〇〇さんにはできないよ。」  
私はときどきこんな言葉を耳にします。みなさんも聞いたことはありませんか。クラスでの仕事や係活動など、それぞれの役割を決めるときに聞く言葉です。悪ふざけで言っているのか、本人の目的を思っているのかは分かりません。しかし、本人が聞く「悪く思われているんだ」「決めつけられているんだ」という気持ちになり、辛く感じる人もいます。その役割を自分なりにがんばろうと思っている人に対して、とても失礼だと感じました。また、そんな言葉に流されて、その人の個性をばかにしたり決めつけをしたりすることも人を傷つけることになると思います。

また、人を傷つける言葉を言っていないか、分かっていても、感情がおさえきれないなどの理由で、つい相手がいやな思いになることを言ってしまった経験はありませんか。  
言葉は相手を元気にすることもありますが、ときには人を傷つけてしまうこともあります。言った人が忘れていても、言われた人はきつと心の底にその言葉が残ると思います。だから、伝えたいことなるかを十分に考えてから相手に言葉を伝えることが大切だと思えます。自分から出る言葉には十分気をつけて、おたがいが気持ちよく過ごせるようにしなければいけないと思います。

「〇〇さんにはできないよ。」  
このような傷つく言葉を減らすために、私は思いやりのある発言、行動を意識していきたいと思えます。辛いことを言われながらもがんばる人に対して「大丈夫だよ。」  
「気にせずがんばろう。」  
「この言葉はかけたいです。思いやりをもつことは難しいことではなく、相手の立場になって考える、やさしい言葉をかけるなど、ちょっとしたことから始められます。すると、相手はうれしい気持ちになります。よいことばかりです。」

「言葉」は簡単に使うことができ、相手との会話の中で正しく使うことで、楽しい時間をつくれるものです。しかし、間違った使い方をすると相手をおどく傷つけてしまうものにもなります。だからこそ、言葉の重みをよく考え、誰に対しても、傷つく言葉を言わないように心がける必要があります。私は、言葉を大切に使い、相手を傷つけないように気をつけていきたいです。また、身の回りに間違った言葉をつかいをしている人がいたら、言った人に注意するような声をかけたり、言われた人にやさしい言葉をかけたりしたいです。

## 「挑戦の楽しさ」

貴生川小学校 六年 一木 陽斗

私は、昔から挑戦することが苦手だった。新しいことにチャレンジするのは、なんだかこわくて失敗したところしよ。うまくできなかったらみんなに笑われるかもしれない。そんなふうに考えて、やらない理由ばかり探していた。  
小二に始めた剣道も同じことで、その気持ちは変わらなかった。けい古は楽しい。竹刀をにぎって打

ち込むと心がスッカリする。けれど、試合は「負けだらしよう」と「弱いつて思われたらいやだ」そんな不安が頭の中をぐるぐる回って、試合に出る勇気がなかなか出なかった。先生や仲間、「試合に出ようよ」と言われても「うーん」と答えることができなかった。負けるのがこわくて、今まで数回しか試合にチャレンジできていない。

そんな私が初めて自分から挑戦したのが、市の公共施設を市民から募集するということだ。新しくできる施設の名称を市民から募集するというチラシを見て、「応募してみたい」と思った。まちの人たちが使う施設の名前を自分が考えるなんて、なんだかワクワクした。でもそのとき、近くにいた人が「こんなのに応募する人いるのかな？」と言った。それはまるで、自分の気持ちを否定された気がした。「やっばりやめようかな」と弱気になったけれど、それでも「やってみよう」と思う気持ちを信じて名前を考えた。

その施設は地域のみんが集まって使う場所。だから「みんな来る」という願いを込めて、町名と組み合わせ「みなくるプラザ」と名付けた。学びや活動の中心となって、自然と人が集まる場所になってほしいという思いを込めて、応募用紙に書いて送った。

しばらくして市から手紙が届いた。なんと「みなくるプラザ」が採用されたのだ。ぼくのアイデアが地域の施設の名前になるなんて信じられなかった。家族も友達も「すごいね」と喜んでくれて、ぼくは初めて「挑戦してよかった」と心から思えた。

挑戦には勇気がいる。失敗するかもしれない、誰かに否定されることもある。でも、やってみることと新しい自分に出会える。今回の経験で、ぼくは少し自信が良かった。「やってみよう」と思った気持ちを信じて良かった。試合に出るのは、まだ少し弱い。でも、勝ち負けを気にせず挑戦するようにしたい。負けてもその経験がきつとぼくを強くしてくれるはずだ。

挑戦は一人ではがんばることじゃない。名前募集では、家族が「いい名前だね」と応援してくれた。ぼくはそんな支えの中で少しずつ前に進んでいる。これからもこわくも一歩ずつ勇気を出していきたい。挑戦することで、ぼくはもっと強くなれる。ぼくの挑戦が誰かの役に立つといいなと思う。  
挑戦には勇気が必要だからこそ、友達や家族だけでなく町全体が挑戦しやすい、そんな町のムードになるといいなと思う。そんな取り組みを町が作ってくれたらいいと思う。頑張ろうと努力している人、一生けん命に頑張っている人はとてもカッコいい。そういう人たちが笑っている人が減って、応援しあえる世の中になってほしい。

## 「この学校にゆだねる」

柏木小学校 六年 川嶋 勇貴

私は、より良い学校にするために、あいさつについて考えてみました。

私は、あいさつをすることによって、どのような効果があるかをインターネットで調べてみました。あいさつをすると、相手との良好な人間関係を築きやすくなり、自分の心理状態をポジティブにする効果があることが分かりました。そして、コミュニ

ケーションを活性化させ、信頼感を高めることで、集団をより良い雰囲気にするだけでなく、相互理解や安心感をもたらすことができるそうです。  
私たち六年生は、学校のみんなであいさつができて、あいさつのスローガンを考えました。一学期の初めのころに、六年生のみんで話し合った結果、「みんな毎日あいさつしよう」に決定しました。

また、私のいとこの小学校では、「笑顔デイ」という取り組みをしているそうです。「笑顔デイ」の日は、朝の時間に人権についてみんな考えるそうです。毎回テーマがあり、それにそった放送を聞いたり、映像を見たりした後、自分の考えを話し合ったり、家に帰って家族の人たちと話をし、さらに深めていくそうです。あいさつがテーマの日もあつたと聞きました。

私は今、分団児童会で副分団長をしています。分団児童会でみんなの意見を聞いたときに、あいさつができていないという声が多かったです。私は、みんなが大きな声で話せばいいとあいつをしてほしいなと思っていました。そのために、自分から進んで大きな声であいつをすることを心がけています。

また、私は登校班で班長をしていて、登下校の時には、先頭を歩いていきます。前の人があいさつをするのを後ろの人もあいさつをするように頑張っています。大きな声であいつをするように頑張っています。あいさつを返してもらった時には、何か心が通じ合った感じがしてうれい気持ちになります。

今回あいさつについて考えてみて、あいさつは人と人の心を通じ合わせることでできて、一番身近にある大切なコミュニケーション手段であることが分かりました。

より良い学校にするために、学校全体で気持ちの良いあいさつをすることを心がけていきたいです。

## 「好きな事が道をひいた」

水口小学校 六年 岸村 崇志

ぼくには、小さい頃からずっと好きな事がありました。それは、工作や折り紙です。保育園の頃、毎日のようにハサミやのりを使って、紙を切り貼ったり遊んでいました。発表会では、「折り紙博士」としてステージに立ち、自分が作った作品を紹介したこともあります。

そんなぼくにとって、大きな転機がきたのは、小学二年生の時です。誕生日プレゼントで「オリガミアドベンチャーランド」という恐竜や古代生物、伝説の生き物のついでに難しい本もあつた。その本には、今まで見たことのないような、難しい折り紙がたくさんあつていました。嬉しくて早速チャレンジしてみたいけれど、全然うまくいきませんでした。線通りに折っても、思ったような形にならず、何度もクシャクシャにしては泣いていました。でも、ぼくはあきらめませんでした。「絶対に折れるようにしたい。」という気持ちで、何度も何度もチャレンジしました。すると、一か月たった頃、ついに一つの作品を完成させる事ができました。ドラゴンです。その時の気持ちは、言葉では言い表せないくらい嬉しくて、感動したことを今でも覚えています。

それからというもの、ぼくは、学校の休み時間にも図書室で借りた本を見て、折り紙を折るようになりました。すると、周りの友達も「それ、すごい！」「折ってー」「ちょうだい。」と声をかけてくれるようになった。だんだんと「教えて。」という友達も増えていきました。そんなふうに友達と一緒に折ることで、ぼくは自分に自信がもてるようになったのです。三年生になってから、学級活動でも工作や折り紙の力を活かすことができた。壁飾りや係活動のポスター作りには、「文字の周りに飾りをつけてみよう」とアイデアを出したり、クラスでつるを折る時間に、先生から「たかしくん、来てー」と前で折り方を説明する役を任せられ、頼りにされたりするようになりました。「折り紙と言えはぼく」という雰囲気がクラスに広がりました。

ぼくは、この経験から一つのことを学びました。それは、「好きな事をあきらめずにつぎつとめると、周りの環境が変わっていく」ということです。最初は、一人でコツコツやっていた折り紙が、いつの間にか友達や先生とつながるきっかけになりました。自分の「好き」がみんなの役に立つたり、笑顔を増やしたりできる事を知りました。

これからもぼくは、自分の「好き」を大切にしていきたいです。そして、将来は物作りができる仕事について、人に喜んでほしいです。

ぼくにとっての「道」は、自分の手で切り開いていくものだと思っています。

## 「誰もが安心して食べられる社会へ」

緑野小学校 六年 大森 朝陽

私は、レストランやスーパー等の食品をあつたかう店で、より分かりやすいアレルギー表示が必要であると考えています。

なぜなら、日本には日本人だけでなく、様々な国から来た人が住んでおり、その中には、ウイガンや宗教上の理由で食べられない物がある人がいるからです。日本人の中にも食物アレルギーを持っている人や色々な考え方をもちつる人が増えており、「食に制限のある人」が今の日本にはたくさんいます。実際私は、重篤な食物アレルギーを持っており、外食時や加工食品を食べる時、食品の表示が分かりにくいため、購入をためらってしまうことがあります。

私は、小学二年生の時に、甲賀市に引っ越して来ました。それまでは、食物アレルギーがあるため、給食を食べることができず、このまま食べられないままの生活を送っていました。毎日弁当を作ってもらっていましたが、その生活が、何より友達と一緒に、「今日の給食は何かな?」「今日の給食はおいしかったな。」といった会話をすることができなくなりました。この経験を通じて、同じ物が食べられない悲しみも、同じ物が食べられる喜びも知りました。だから、私と同じような食べられないことで悲しい思いをする人が減ってほしいという思いから、アレルギー表示をよりわかりやすく表示した方がよいと考えます。

では、具体的に何をすればよいのか。私からの提案は二つあります。

一つ目の提案は、レストランやフードコートでアレルギーが書いてあるアレルギー表示を必ず置くようにすることに加え、アレルギー表示がその店にあるということが一目でわかるポスターや看板を置くこと。二つ目の提案は、ピクトグラムを使用したアレルギー表示をすることです。ピクトグラムとは、絵や

図記号で情報を伝えるためのデザインで、例えば、非常口のマークやトイレの表示などがあります。ピクトグラムを使用してアレルギーを表示すれば、言語が異なる外国人や子どもにも分かりやすく情報を伝えることができると考えます。一部のレストランでは、ピクトグラムでアレルギー表示をしてくれているところがあり、アレルギーが分かりやすいため安心して利用ができます。

この二つの提案を実現すれば、「食に制限がある人」も、そのついでに人も、みんな一緒に安心して食事ができるようにするのではないかと考えます。そのためにも、アレルギーをより分かりやすく表示するということが大切だと考えます。

## 「家族のあたたかさ」

伴谷小学校 六年 指宿 大翔

ぼくは家族の温かさについて話したいと思えます。ぼくの家族は父と母、姉とぼくの四人家族です。ぼくは時々、家族のありがたみを忘れてしまふことがあります。友だちと遊んでいる時や楽しいことに夢中になっている時は、家族がどれだけ支えてくれているかを考えることがありません。でも、ふとした時に家族の存在の大きさを感ずることがあります。一昨年のことです。ぼくはインフルエンザで学校を休んだことがありました。熱が出て苦しむ中、布団の中ですと横になっていた。その時、母が一日中そばにいて看病してくれました。食欲がないほくにうどんを作ってくれたり、冷たいタオルでおでこを冷やしてくれたりしました。夜も何度も起きてぼくの熱を測ってくれました。ぼくは「母ってこんなに大変なのに休まないでいてくれたんだ」と思っていました。

また、父は仕事で疲れているはずなのに帰ってくる。「大丈夫か?早く元気になるよ。」と声をかけてくれました。その声を聞いただけで、少し元気がなつたような気がしました。普段も話してくれませんが、その一言がとて心強かつたのを覚えています。その言葉で不思議と笑顔になりました。病気が治つた後、ぼくは家族の優しさを強く感じました。普段は当たり前のように一緒にいる家族ですが、ぼくが病に倒れた時に一番近くで支えてくれるのはやっぱり家族だということを知りました。

その時から、ぼくは「ありがとう」をできるだけ伝えるように心がけています。母がおいしいご飯を作ってくれた時、父が野球を教えてくれた時、小さなことでも「ありがとう」と言うようにしています。最初は少しはさかしくつたけれど、言葉にする自分も心も温かくなり、相手も笑顔になってくれます。ぼくは時々、家族とけんかをすることがあります。特に姉とは、おかしな取り合いや場所の取り合いがよくもめします。でも、けんかをしても最後には仲直りをします。姉が「ごめんね」と言ってくると、ぼくも素直に「ごめん」と言えます。家族だからこそ本気でけんかをすればよいのか。私からの提案は二つあります。

一つ目の提案は、レストランやフードコートでアレルギーが書いてあるアレルギー表示を必ず置くようにすることに加え、アレルギー表示がその店にあるということが一目でわかるポスターや看板を置くこと。二つ目の提案は、ピクトグラムを使用したアレルギー表示をすることです。ピクトグラムとは、絵や